

### 第三百十四話 大東亜戦争：米ソ中の世界戦略に翻弄

大東亜戦争は、アジアをめぐる日米欧そしてソ連更にはその主プレイヤーである中国国民党や中国共産党の国益を掛けた思惑・戦略の絡み合いの中で、彼らの思惑に囚われ、或いは日本の戦略判断ミス等が重なって惹起し、日本は敗戦の憂き目にあったと云えよう。

#### 1 欧米列強の対支戦略



19世紀末英・仏・独・露は支那大陸に夫々の勢力範囲を確立し、他国の容喙を許さない状況であった。因みに、英国は揚子江流域一帯・香港や広東省・山東半島北部の威海衛を、仏は膠州湾・広東省西部・広西省・雲南省・海南島を、独は青島を含む山東省を、露は満州北部一帯をとという具合である。

遅れて支那大陸への進出を企図した米国にとっては、残されたフロンティアは満州のみであり、為にロシアの南下を阻止するためにも日露戦争で日本を支援する必要があった。日英同盟を廃止（1923）に追い込んだのも同じ脈絡だ。満州における権益確保のために、鉄道王ハリマンによる満鉄買収計画があり、満鉄（等）に関する中立化や国際管理案を突き付け、遂には、張作霖の承認を受けて満鉄併行線計画を実現させた。日本の権益が脅かされるのは必定であった。（12話）

その一方で、米国は中国に対する教育投資や文化事業を行い、反日意識を醸成するとともに、張学良に対する多額の軍事援助を嚆矢として蒋介石軍に対する軍事援助（10話）、中国のリーダー養成や支援（11話）、更には満州事変処理に際して満州国国際管理を持ち出し日本締め出しを策していたとも考えられる。

一方、共産革命後のソ連の動きも急である。米ソの国交樹立（1933、見返りは何か？）により、米ソ中の連携が深まってきた。具体的には国共合作があり、西安事件の背後に米ソの動きがあるのではといわれる。反日事件が多発し、ソ連の指令を受けた共産ゲリラの暗躍と、煽られ仕組まれた暴動を拱手傍観した中国官憲等が問題解決を困難にした。

米ソの連携を具体的に証明するのは難しいが、米中ソの思惑が見事に一致して日本は追い詰められていったとしか考えられない。大東亜戦争は満州に始まり満州で終わった？

#### 2 盧溝橋事件以後（メモランダムにも関連話が幾つか。）

日米交渉の不調（50話 日米交渉虚し！、185話 数多の和平交渉の不成就の原因は？）、蒋介石に対する列強の軍事援助（280話 レンドリース法と非交戦国の参戦）、米国政策に対するソ連の影響（292話 実はソ連と戦っていた）等々米ソ中の巧妙な連携行動が日本を苦しめてきたと考えると腑に落ちる。

#### 3 若干の所見

- (1) 大東亜戦争は関係国の国益のぶつかり合いとの側面が強いのだが、日本にはその意識が少なかったように感じる。冷徹に国際情勢や関係国の狙いをしっかり分析すれば乗ぜられることも少なかっただろうし、日本に有利な策を講じることも可能だったかも知れない。
- (2) 満州の権益は当時の国際法に合致する合法的なものであったし、高平・ルート協定（1908）で米国も満州権益を認めていたにも関わらずにそれに横槍を入れる米（ソ）に多大な違和感があるし、あれほどの日本人や朝鮮人に対する暴虐行為を排除するには相当の決意が必要だった筈だ。支那事変を拡大させずに、満州権益の保持を厳守していたら局面は大いに違った筈だ。一方、気になるのは日本の立場を列強に理解させる努力がなされたのだろうかということだ。正義は理解される筈との幼稚な思い込みが我々にはないだろうか？米国善人説を盲目的に信じているとしたら大問題だ。
- (3) 戦後世界を俯瞰した時に、中共軍の支那大陸覇権を許したのは米国の責任だとの思いを強くする。今頃臍を噛んでいる筈だ。米国の無節操・無定見さ。

(了)